



Title	上級英語のL.L.
Author(s)	羽田, 三郎
Citation	大阪外大英米研究. 1966, 5, p. 33-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98961
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上 級 英 語 の L. L.

羽 田 三 郎

ま え が き

語学ラボトリー協会の「L. L. A. 通信」や *Language Laboratory* を見れば LL に関する内外の資料も相当あらわれ、研究や議論も、機械そのものから教材、実施、そして評価へと進んできたようである。

大阪外国語大学でも 1 室 (30 ブーズ) から 2 室 (計 70 ブーズ) へ、そして自習室へと、次第に設備は拡張され、利用は全学 (1 部・2 部・短大・留学生別科) に及び、各科それぞれ入門期と上級の 2 回は使うようになった。

英語学科では、1961 年以來、1 年生には英語学の講義と併用して必修、4 年生には随意として使用してきた。私は上級の方を受持ち、1961 年度は学年の途中だったので全く実験的に、翌年からは *Business English* と抱き合わせで使い、本年からは独立して (それでも 30 ブーズの室しか使えず、学生定員より少ないので選択科目として) 使っている。毎時ブース数からハミ出した学生が傍聴のみでも希望してやって来る状態である。

1 年生に対しては音声学の講義などと併用して、目標も教材も明確に、体系的に実施されているが、問題は私の上級コースである。担当しているからには多少の見識もなければならぬはずだが、なにぶんにも、英語専攻の上級生に、しかも週 1 回 (90 分) 通年という、LL としては変則な条件下に実施するのであるから、世の LL 論議とは少しちがった見解にならざるを得ない。

先般 (1965.6.12.) LLA 関西支部総会で講演を依頼され、同様の意見を述べた。表題はその時、林栄一先生につけていただいたものである。その時は中・高校教員を含む、やや一般的聴衆向きだったので、今それを手直ししつつ、相当英語のできる上級生に対する LL 授業の問題点を書いて、関係各位の

御叱正を仰ぎたい。

与件と対策

A. 上級英語

まず与えられた条件のうち、本学学生の素養は、教える者が感謝すべきほどである。すなわち、成績の良し悪し、意欲の大小はあるにせよ、入試を究破して以来3年有余、1年次ではLLも使い、毎年最低限2人～3人の外人教師の単位を取り、ESSなどではspeechにdebateに各所で入賞・優勝するという猛者を含み、ガイド試験・商業英語検定試験・実用英語検定試験にも合格するという達者な人もいる。それをつかまえて今さらLLで何をする？と思う向きもあろうが、後述するように、現実はずしも楽観を許さない。

・日本の学校で10年英語をやっても、英語に関する知識は相当なものだが、聴取・書取・復唱・通訳など各種の動作をLLでやらせてみると、意外なほど欠陥が露呈する。中学での入門期以外は、知識と技能との「跛行性」がだんだんひどくなるのが日本人の英語と極言して大過なかるう。

B. 変則LL

日本の大学の授業時間は90～100分、毎週1回、長い休暇を隔てて2学期制という、語学には全く不向きなことだ。LLはintensiveに用いるもので、そのための特別学級か講習会のほうがLLらしいやり方ができる。

C. 対策

別に妙案を持ち合わせていないが、上述の与件に苦情を言うのみでは建設的でない。普通教室における頭でっかちの授業とLLとが相殺的にならないように、何とか相乗的効果を生むようにならぬものだろうか。以下順次述べて行く間に示唆するつもりである。

LL施設の不足、器材および時間の不足、intensiveでなくsporadicにならざるを得ない時間割——これらを改めるにも限度がある。物量を誇るアメリカでも必ずしも豊かでなく、ボロボロの機械をまわしているところもあるとい

う。私見では「テープレコーダー1つ」ですむ作業も多い。学生を LL に入れて、さてもったいない使い方をしているところもある。何十本もの教材テープを外国から輸入し、その国の言語芸術の華を聞かせるのは、たしかによいことだが、それだけなら LL でなくてもよい。大学の LL を論じたものの中にもこの程度の「鑑賞用」に終始するような発言は LL らしい使い方とは言えない。

そこで目標の限定によって効力倍増を計らねばならぬ。要するに音声による英語の学習だ——というだけのバク然たる利用では、学生に意欲をわかせることも困難だし、教案も立たない。入門期は一応日常会話的でよいとして、上級には内容的にどう高めて行くか。私見では、実用的・具体的話題、その実用も日本人の使う英語としての社会的必然性あるもの、もっとしげれば、当該学科学生の近き将来に直結するものがよい。

LL 本来の理想を言えば、単なる teaching aid ではなく、LLを中心とした語学教育が根底から成立して、電話1本かけても先方には日本人が話していることがバレない位になることだろう。その意味では「上級」ということは、猛烈な早口の native speaker を follow し、それに負けず outspoke できることもかも知れない。しかし、ここで少し横車を押すと、日本人が英語を使って国際的に活動する場面は、何もかも native speaker 並みになってしまうことよりも、大なり小なり各人の profession の必要からであって、言語的能力としては100点ではなくて60点ぐらいでも、せめて各人の professional conversation (外国人で専門を同じくする人との会話)に少々 broken でも押しまくる必要がある。この必要は文科系のみならず、むしろ理工系にも多く、貿易商が外人と商談をする、物理学者が国際的学会で発表・司会を行なうなど、「お茶一杯いかが?」式の会話から、substantial な内容ある discussion に高めねばならない。

そこで、既成教材、市販テープのみに頼った画一的授業でなく、各クラス・各教授者の特色・個性の如実に出た LL 授業でよいのではなからうか。

D. Business Communication の立場から

私の場合は Business English と抱き合わせて出発した事情もあって、目標も体系も商用ということで統一している。商業英語も昔日のコレポンとは異なり、そのコレポンすら通信手段の発達により、通信衛星による同時通話が実現せんとする時代である。机に向って文案をねるのみではなく、テレタイプをバンバンたたき、ナマの英語でどしどし仕事を進める力が必要になった。人の往来もさかんで、海外出張、国際会議が増え、通訳も、個人・会議・逐次・同時・多国語間と、質・量ともに高まってきた。広告・宣伝の分野でも、copywriter は文案をねるのみでなく、ラジオ・テレビの script から PR 用映画の説明まで、スタジオを借りて英語で吹込むようなことも既に行なわれている。これらを全部やるわけでもないが、Business English は国際マーケティングの見地から統一体系化されつつあり、内容・表現ともに教材プログラムに乗せやすい利点がある。

商用会話と称して街で shopping するときの会話などを並べただけのは、ここにいう Business Communication とはちがうことを念のため記しておく。

初使用時のショック

初年度、有志学生のみを試みたところ、次のような所見を得た。教材はまだ作ってなかったので Vernon Brown, *Improving Your Conversation II* を流してみた。センテンスごとにポーズのある単純反覆であるが、前述のような猛者達でも案外ついて行けないのに、学生も私もおどろいた。学生の名誉のために付言するが、聞いて意味が全くわからぬほどではない。たゞポーズの間に反覆し切れない。こんなことで卒業してよいかと真剣に言う学生もあった。

弁護すべき点は、機械を遥って来る音のヒズミ、コンテクストを離れた断片、顔色や身ぶりが見えない言語音のみによる聴取——こういうハンディキャップはあるものの、多数の外人教師に習い、ESS 的活動で練習した者にも次のような欠陥がある。

文脈や場面、身ぶりなどで埋めていたギャップが、言語音のみにになると、まだ耳が不十分とわかる。自分の発言も、ナマの会話では不完全な文ですませていたが、教材テープの通りに反覆せねばならぬとなると、ポーズの時間内にはいり切らない。

発音は、個々の音（例えば r と l, s と th など）は1年次の speech clinic と平素やかましい外人教師のおかげで、あまり直すところはない。しかし、全文のイントネーションやテンポは、教材のハズミのある米人の発音に比べると、学生のは、相当スピードはあっても依然として平板でローマ字読みの感が残る。

Is-he-a doc-tor ? （教材）

Is—he—a—doc—tor ? （学生）

また、‘This isn’t an outside line.’（電話について、「これは外線ではありません」）において、学生の多くが ‘This is an outside line.’ と反覆するような傾向がある。文脈上 ‘is’ を強調する必要のないところで、教材の動詞部に強勢があると否定ではないかと感づかないらしい。

固有名詞・数字など重要データで、自分が言い馴れないものは聞き逃す。‘Is Professor Wood at home ?’ のような名前すら不安である。打合わせの時間・場所 ‘Mr. Jones’ office, 10:30, Thursday, November 17th’ を一ぺんではメモすらできない者もある。買物の話で値段も少し複雑になると逃す。‘These are ten yen each or three for twenty-five yen.’ と言われると、いくつがいくらだか印象に残りにくい。

外人による授業も相当ありながらこの状態である。ナマの会話では先方がよほど待っていてくれて、学生の発言も相当の内容と文法がととのっていると、スピード・リズム・文強勢などが完璧でなくても通じて来たわけである。

その後の教案

A. 既成テープの利用

初期のショックは2～3カ月でおさまる。本年度はアメリカ国際協力局製の Intensive Course in English (ICE テープ) の Advanced Course 100 巻を買入れ、LL 授業時間の前半をこれに当て、後半は私製の Business Conversation をやっている。

ICE テープの Text の部の聴取力は大いによい。Dialogue の反覆も、固有名詞などを除いて概ね良好。Intonation 練習は正に上述の欠陥にぶつかるわけで大いにやらせている。そのあと個々の sound 練習は既習とみなして省いている。

このテープはよく出来ていて、はじめに長文 Text があり、順次小単位の練習になる。一見逆順であるが、年齢的に高い大学生に、面白くない素音練習から入らずに、興味ある話題（概ねアメリカ風物）の全文把握から入っている。物量を惜しまぬアメリカ式で、教材をくり返す必要あらば何回でも“Listen”と命じて聴かせている。テープの浪費とすら感じるが、かけっ放しでも必要な聴取量と発言量が計算されているのであろう。しかも毎週20～30時間もやって、I, II部各4～6週間の intensive course である。ここに至ってたちまち日本式では困ることになり、私のクラスでは、教室では録音したあと、Dialogue 部の練習をもう1回やるのみで、あとは自習室の利用にまかせるほかない。熱心な学生はすべてのテープを保存し、自習室へ入りびたりで練習している。自習室がなければ LL も価値半減どころかゼロにすら近くなろう。

B. 私製テープ（その一）

次に自家製テープを披露させていただく。その一は、外人の声をあらゆる機会にとらえることであり、その二は外人の協力を得て、あるいは自分ひとりで吹込むことである。

旺文社あたりから世界偉人の声がレコードになって出ていたり、東芝からもチャーチルの演説が出た。Elizabeth II, Nehru, Pearl Buck, Churchill, Kennedy などと聞かせて行くと、英語の方言・個人差・スピーチの様式差など、

各種の英語に接して学生の了解度はまちまちである。テストしたわけではないが、印象を言わせてみると、近頃の学生は英人よりも米人のほうに馴れ、テープを通すと男声より女声のほうを聞きやすいと言う。

私は自宅でもテレビ・ラジオの番組から、なるべく offhand に話している外人の声を取っている。インタビューや座談が多く、最近の例をあげると、英人では Butler 外相、Maudling 蔵相、Atlee 元首相、Mackenzie 教授、米人では Bundy 国務次官補、Rusk 国務長官、仏人では Paul-Pierre Schweitzer 国際通貨基金専務理事、その他ユーゴー、インドなど非英語国民の声も参考にさせている。

これらは「時の人」で学生の関心もあり、話題も充実している。また、たゞ聞かせるのみでなく、会見の要領、司会者の役割り、通訳の形式（逐次・同時・要点・逐語・字幕・吹きかえ等）にも注意を払わせる。これら素材テープを再編集して練習用教材とすることもできる。

C. 私製テープ（その二）

さて本当に教授者が自分で計画し吹込む段になると、また少し横車を押してみたい。

その一つは物理的精度について。防音完全な録音室はあっても満員のことが多い。場所と時間にしばられるよりも、零細な余暇を利用して吹込むのでなければ、LL 教師は生命がもたない。そこで少々の雑音は気にしない。

ある時、LL で有名な某大学の外人教師が私の授業を見に来られ、その時まわしていたテープの速度が9.5で、しかも earphone の frequency がいくらかだから、「そんなことでは語尾の -s 音が消えている」と忠告された。「えらい専門家だ」と感心した反面、「そんなことぐらいで話がわからんようでは、とても国際電話はかけられない」と失敬な考えが頭をもたげた。（そうは言わずにおいたけれど——。）航空管制用の英語を勉強するには、わざと雑音を入れる。私も旧海軍で敵信傍受をやったが、条件のわるい時のほうが多かった。

市販するのでなければ、少々雑音は上級用には歓迎だ。ICE テープでは電話音は電話音らしく入れてあり、realistic である。

つぎに、日本人が吹込むことについて。入門期に大切な speech clinic 用なら native speaker が必須である。しかし上級 LL となると、「聴取り」ばかりに目的があるのでなく、比較的やさしい日本人の発音で聞き取ってからも、それに対する quick response、さらに英和、和英の翻訳という bilingual な response、さらに長い発話の記憶、メモ、そして通訳というような作業がある。

学生から「先生の(1)は、まだ時々舌をはなれますな」ぐらいのことを言われても信用を失わないだけのことは出来る。LL に入らなくても「英語教師は毎秒毎秒何かのエラーをやっている」とすら極言する joke がある。自分の発音が機械で誇張されて流れて行くのはイヤなものではあるが、次に述べるような独特のテープを作るには、少なくとも試作中は外人の協力を借りにくく（謝礼の問題もある）、日本語で入れる部分もある。

今試作中のテープは2種、1つはビジネス一般で、貿易を中心としている。受付から面会までのような社交会話の序曲もあるが、そのあとは輸出入取引段階順を追って、かなり高度な商談である。もう1つは銀行用で、これは用語も場面も比較的限られ、計画が立てやすい。両替、送金、預金など technical だが範囲がきまりやすい。

各テープの中味は、単純反覆から同時通訳に向って順次訓練するつもりになっている。「つもり」であって、まだどの部分をどれだけ練習させれば身につくかは実験中である。

今やっている例では、Question と Answer が約5～10組出てくる一群を Example 1 として、それを1回全文聴かせ、次にセンテンス毎に repeat させ、次にセンテンス毎に日本語に訳させ、次に日本語で吹込んだところを英訳させている。優秀な学生なら全文聴取と1回反覆のとき、既に英語の原文は概ねおぼえてしまい、あとの英和・和英練習は、頭ではわかり切っているのを、

舌で追いかけるのみとすら言える。

やがてこれを、英一（和）一和一（英）の順に、（ ）のところへ通訳が介入する形式にして行き、全文聴取りはせずにイキナリ本番に入り、また、一人の発話を長くし、メモを取る要領、メモを見ながら英語または日本語で言う練習と高めて行く。昨年までは Business English の講義と抱き合わせて時間が足りなかったもので、この辺までの大要を実験してみたただけだが、通年授業になったので今年はもう少し進む。

テープの lower track の volume を下げたり、天井スピーカーを利用したりして同時通訳のまねごともし先年実験してみたが、なかなかむずかしい。講演調のものは平素外人の講義を聞いているせいか、案外よく聴取ってくれる。私が先年毎日新聞社で行なった英語講演のテープなどは、一節ずつ流すと、かなり上手に通訳する学生がいた。

反省とまとめ

上述に対する反省としては、英和の作業において日本語のむずかしさが痛感された。特に、教室用直訳癖がわざわざしている。

“My name is Henry Jones. I'm expecting a 100 pound remittance from London. Has it arrived?” とあると、「私の名前はヘンリー・ジョウズです。私はロンドンから 100 ポンドの送金を期待しています。それは着きましたか？」と訳さねば気がすまぬらしく、かえって手間取る。こういうことは LL 外で通訳様式論を講義しておかねばならない。

和英作業は案外よくできる。

「手数料は送金の 100 ポンドから引きましようか、それとも別にお払い下さいますか？」に対する原文は “Would you like to have the commission deducted from this 100 pounds or would you rather pay it separately?”

これをすっかり言い直して、すばやくポーズ時間内に納める学生がある。

“How would you like to pay the commission” とまず一括して, “... separately or deducted from the remittance ?” と多少不備でも要領よく納めてくれる。

元来 LL 以外の方法でここまで出来た学生を預るのであるから, 内容的に, また心理的に, よほど引きつけるものがないと退屈する。しかし幸い, 上述の如く, definiteな 目標を以て大胆な実験を遂行している。学生の意欲は相当高く, 納得行くまで練習する時間がないという不平は聞くが, はじめに述べた変則的条件下のこととて, これで精一杯である。

LL 専門家の間には, 実験装置をいろいろ考案して, もっと科学的な実験をやっておられるところもあり, こんな乱暴な発言は許されないであろう。しかし細工は流々, 明日にも世の中へ出て行く学生に応分の力をつけて出したいと努力している。お気づきの点, 大小となく御教示贈わらば幸いである。

(1965. 7. 11.)